

---

# きれい過ぎた

山羊ノ宮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きれい過ぎた

### 【Zマーク】

N1044P

### 【作者名】

山羊ノ宮

### 【あらすじ】

その丘には公園があつて、そこから見える夜景は素敵で、よく僕は彼女とここへきて夜景を見ていたんだ。

その丘には公園があつて、そこから見える夜景は素敵で、よく僕は彼女とここへきて夜景を見ていたんだ。

その公園には大きな樺かしだか楠くすだかの木がある。

残念ながら、あまり僕は木の種類について詳しくない。

でも、だからと言って日常生活には何ら影響が無いので、別に本當はそんなこと知らなくても良いのかもしない。

その日も僕らはその木を背せもたれにして、座くわっていた。

ごついつして決して居心地がいいとは言えないけれど、それでもそ

こが僕らにとって特等席なのは昔も今も変わりはしない。

「ねえ、きれいな空だね」

他愛も無い会話の中で彼女はそう言って夜空を見上げる。

僕は僕のコートの中で暖を取る彼女の柔らかな体を抱きしめる。

「うん。 そうだね」

そして、僕は空なんて見上げずに彼女の柔らかな髪の中に顔をうづめた。

細く甘い香りのする彼女の髪は触れていて気持ちがいい。

少し前だつたかな？

もしかしたらおいしいかもって思つて、食べるふりをしたら、彼女にすごく怒られた。

おいしそうだつて、理由を言つたらもつと怒られた。

褒めてるつもりなのに何で怒られるんだろう？

まずそぞりすつといいと思つただけれど。

彼女の感性がよく分からない。

「いい匂い」

彼女の耳元に囁く。

「何かその言い方やらしい」

別にそんなつもりはなかつたのだけど、そう言われてみればそう感

じゃないでもない。

実は僕はいやらしいのか？

否定はできなけれど。

それから彼女はもぞもぞと動くので、僕はコートのボタンを外して彼女を解放した。

「冷えてきたから、もうそろそろ帰ろっか？」

「そうだね」

吐く息はまだ白くはならぬけれど、それでもずっと外にいるには寒い季節になつて来た。

彼女はお尻をはたき、僕がぐしゃぐしゃにした髪を整えて、帰り支度をしている。

そして、僕はコートのボタンを留めながら、空を見上げた。

「あのさ・・・」

「何？」

彼女は呼ばれて僕を振り返るが、僕はまだ空を見上げたままだった。冬が近くなつて空気が澄んできている。

街の明かりが邪魔をして、満天の星空とはいかないけれど、けれどいつもより星が多く見える気がする。

今までずっと人の営みの明かりを楽しんでいたけれど、そんな明かりがあるずっと前からこの星達は輝いていたんだ。

改めて気が付く。

ずっとそこにあつたのに。

そして、僕は呟いたんだ。

「愛している」

「・・・ありがと」

恥ずかしいのか、照れくさいのか彼女の言葉はそつけなくて、無愛想だつた。

すたすたと家路を急ぐ彼女の後を僕は慌てついて行く。

そんな態度を取られると僕だってどんどんと恥ずかしくなつていいく。

普段僕がそんな事を口にする人間じゃないつて分かつていてるくせに。

ただその時は・・・

そうだな、理由があるとすれば・・・

そう、ただ見上げた月がきれい過ぎたんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1044p/>

---

きれい過ぎた

2010年11月24日02時46分発行